

第一研究所

來翰綴(陸普)

昭和十六年

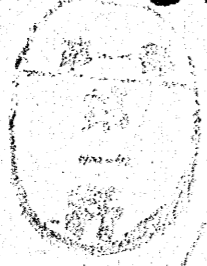
陸軍省
陸普
516~4
231

陸軍省
第一研究所

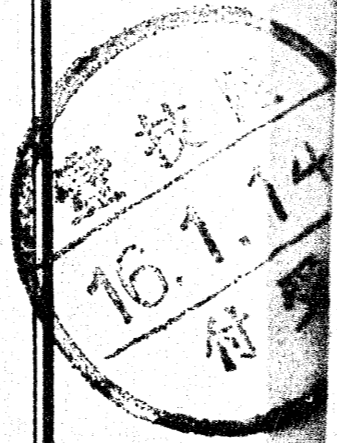
Sub 2
Item 131

7 8 9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 2 3 4 5

0649



戰
陣
訓



0990

陸訓第一號

本書ヲ戰陣道徳昂揚ノ資ニ供スベシ

昭和十六年一月八日

陸軍大臣 東條英機

第二 戦陣の嗜 二七

結 三三

戦陣訓

序

夫れ戦陣は、大命に基き、皇軍の神髓を發
 揮し、攻むれば必ず取り、戦へば必ず勝ち、
 遍く皇道を宣布し、敵をして仰いで御稜威
 の尊嚴を感銘せしむる處なり。されば戦陣
 に臨む者は、深く皇國の使命を體し、堅く

皇軍の道義を持し、皇國の威徳を四海に宣揚せんことを期せざるべからず。惟ふに軍人精神の根本義は、畏くも軍人に賜はりたる勅諭に炳乎として明かなり。而して戦闘竝に訓練等に關し準據すべき要綱は、又典令の綱領に教示せられたり。然るに戦陣の環境たる、兎もすれば眼前の事象に捉はれて大本を逸し、時に其の行動軍人の

の本分に戻るが如きことなしとせず。深く慎まざるべけんや。乃ち既往の經驗に鑑み、常に戦陣に於て勅諭を仰ぎて之が服行の完璧を期せむが爲、具體的行動の憑據を示し、以て皇軍道義の昂揚を圖らんとす。是戦陣訓の本旨とする所なり。

本訓 其の一

第一 皇國

大日本は皇國なり。萬世一系の天皇上に在
しまし、肇國の皇謨を紹繼して無窮に君臨
し給ふ。皇恩萬民に遍く、聖徳八紘に光被
す。臣民亦忠孝勇武祖孫相承け、皇國の道
義を宣揚して天業を翼贊し奉り、君民一體

以て克く國運の隆昌を致せり。
戰陣の將兵、宜しく我が國體の本義を體得
し、牢固不拔の信念を堅持し、誓つて皇國
守護の大任を完遂せんことを期すべし。

第二 皇軍

軍は天皇統帥の下、神武の精神を體現し、以
て皇國の威徳を顯揚し皇運の扶翼に任ず。
常に大御心を奉じ、正にして武、武にして

仁、克く世界の大和を現ずるもの。是神武の精神なり。武は嚴なるべし。仁は遍きを要す。苟も皇軍に抗する敵あらば、烈々たる武威を振ひ斷乎之を擊碎すべし。假令峻嚴の威克く敵を屈服せしむとも、服するは撃たず。從ふは慈しむの徳に缺くるあらば、未だ以て全しとは言ひ難し。武は驕らず。仁は飾らず、自ら溢るるを以て尊しとなす。皇軍の

本領は恩威並び行はれ、遍く御稜威を仰がしむるに在り。

第三軍紀

皇軍軍紀の神髓は、畏くも大元帥陛下に對し奉る絶對隨順の崇高なる精神に存す。上下齊しく統帥の尊嚴なる所以を感銘し、上は大權の承行を謹嚴にし、下は謹んで服從の至誠を致すべし。盡忠の赤誠相結び、脈

絡一貫、全軍一令の下に寸毫紊るるなきは、是戦捷必須の要件にして、又實に治安確保の要道たり。特に戦陣は、服従の精神實踐の極致を發揮すべき處とす。死生困苦の間に處し、命令一下欣然として死地に投じ、黙々として獻身服行の實を擧ぐるもの、實に我が軍人精神の精華なり。

第四 團結

軍は、畏くも大元帥陛下を頭首と仰ぎ奉る。渥き聖慮を體し、忠誠の至情に和し、擧軍一心一體の實を致さざるべからず。軍隊は統率の本義に則り、隊長を核心とし、鞏固にして而も和氣藹々たる團結を固成すべし。上下各々其の分を嚴守し、常に隊長の意圖に従ひ、誠心を他の腹中に置き、生

死利害を超越して、全體の爲己を没するの
覺悟なかるべからず。

第五 協同

諸兵心を一にし、己の任務に邁進すると共に、
全軍戦捷の爲欣然として没我協力の精神を發揮すべし。

各隊は互に其の任務を重んじ、名譽を尊び、
相信じ相援け、自ら進んで苦難に就き、戮

力協心相携へて目的達成の爲力闘せざるべ
からず。

第六 攻撃精神

凡そ戦闘は勇猛果敢、常に攻撃精神を以て
一貫すべし。

攻撃に方りては果斷積極機先を制し、剛毅
不屈、敵を粉碎せずんば已まざるべし。防
禦又克く攻勢の銳氣を包藏し、必ず主動の

地位を確保せよ。陣地は死すとも敵に委す
ること勿れ。追撃は断々乎として飽く迄も
徹底的なるべし。
勇往邁進百事懼れず、沈著大膽難局に處し、
堅忍不拔困苦に克ち、有ゆる障碍を突破し
て一意勝利の獲得に邁進すべし。

第七 必勝の信念

信は力なり。自ら信じ毅然として戦ふ者常

に克く勝者たり。
必勝の信念は千磨必死の訓練に生ず。須く
寸暇を惜しみ肝膽を碎き、必ず敵に勝つ
實力を涵養すべし。
勝敗は皇國の隆替に關す。光輝ある軍の歴
史に鑑み、百戰百勝の傳統に對する己の責
務を銘肝し、勝たずば断じて已むべからず。

本訓 其の二

第一 敬神

神靈上に在りて照覽し給ふ。
心を正し身を修め篤く敬神の誠を捧げ、常に忠孝を心に念じ、仰いで神明の加護に恥ぢざるべし。

第二 孝道

忠孝一本は我が國道義の精粹にして、忠誠の士は又必ず純情の孝子なり。
戦陣深く父母の志を體して、克く盡忠の大義に徹し、以て祖先の遺風を顯彰せんことを期すべし。

第三 敬禮舉措

敬禮は至純なる服従心の發露にして、又上下一致の表現なり。戦陣の間特に嚴正なる

敬禮を行はざるべからず。
禮節の精神内に充溢し、舉措謹嚴にして端
正なるは強き武人たるの證左なり。

第四 戦友道

戦友の道義は、大義の下死生相結び、互に
信頼の至情を致し、常に切磋琢磨し、緩急
相救ひ、非違相戒めて、俱に軍人の本分を
完うするに在り。

第五 率先躬行
幹部は熱誠以て百行の範たるべし。上正し
からざれば下必ず紊る。
戦陣は實行を尙ぶ。躬を以て衆に先んじ毅
然として行ふべし。

第六 責任

任務は神聖なり。責任は極めて重し。一業
一務忽せにせず、心魂を傾注して一切の手

段を盡くし、之が達成に遺憾なきを期すべし。

責任を重んずる者、是眞に戦場に於ける最大の勇者なり。

第七 死生觀

死生を貫くものは崇高なる献身奉公の精神なり。

生死を超越し一意任務の完遂に邁進すべし。

身心一切の力を盡くし、従容として悠久の大義に生くることを悦びとすべし。

第八 名を惜しむ

恥を知る者は強し。常に郷黨家門の面目を思ひ、愈々奮勵して其の期待に答ふべし。生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ。

第九 質實剛健

質實^{しつじつ}以^{もつ}て陣中^{ちんちゆう}の起居^{ききよ}を律^{りつ}し、剛健^{かうけん}なる士風^{しふう}を作興^{さくこう}し、旺盛^{わうせい}なる志氣^{しき}を振起^{しんき}すべし。陣中^{ちんちゆう}の生活^{せいかく}は簡素^{かんそ}ならざるべからず。不自^{ふじ}由^{いう}は常^{つね}なるを思^{おも}ひ、每事^{まいじ}節約^{せつやく}に努^{つと}むべし。奢侈^{しや}侈^しは勇猛^{ゆうまう}の精神^{せいしん}を蝕^{むしば}むものなり。

第十^{だいじゅう} 清廉^{せいれん}潔白^{けつぱく}は、武人^{ぶじん}氣節^{きせつ}の由^よつて立つ所^{ところ}なり。己^{おのれ}に克^かつこと能^{あた}はずして物慾^{ぶつよく}に捉^{とら}はるる者^{もの}、

争^{まが}てか皇國^{くわうこく}に身命^{みんめい}を捧^{たも}ぐるを得^えん。身^みを持^{もち}するに冷嚴^{れいげん}なれ。事^{こと}に處^{しよ}するに公正^{こうせい}なれ。行^{おこな}ひて俯仰^{ふげう}天地^{てんち}に愧^はぢざるべし。

本ほん

訓くん

其の三そのさん

第一だいいち 戦陣の戒せんちんのかい

一 一瞬の油断、不測の大事を生ず。常に
 備へ嚴に警めざるべからず。
 敵及住民を輕侮するを止めよ。小成に安
 んじて勞を厭ふこと勿れ。不注意も亦災
 禍の因と知るべし。

二 軍機を守るに細心なれ。謀者は常に身

邊に在り。

三 哨務は重大なり。一軍の安危を擔ひ、一

隊の軍紀を代表す。宜しく身を以て其の

重きに任じ、嚴肅に之を服行すべし。

哨兵の身分は又深く之を尊重せざるべか

らず。

四 思想戦は、現代戦の重要なる一面なり。